

令和6年度根本正顕彰会フェスティバル（報告）

日時 令和6年7月28日(土) 9:30 ~ 11:30

会場 那珂市ふれあいセンターすがや



あいさつ

(1) 平野道代菅谷地区まちづくり委員長



那珂市の名誉

市民の一人である根本正さんについては、ある程度理解しているつもりではあるが、今回、顕彰会と共催の形でフェスティバル開催が実現したことにより、より深く人物像に迫ることができることをうれしく思う。菅谷地区の皆さんはもちろん、多くの人々に根本正さんの生き方について理解が広まり、それが結集されて地域づくりにも大いに役立っていくことを期待したい。

(2) 山田正巳会長

那珂市内の各地区をはじめ、根本正ゆかりの関係市町村で開催して来ている「根本正顕彰フェスティバル」、今年度は、新設された「ふれあいセンターすがや」において、菅谷地区まちづくり委員会との共催を得て開催された。少しでも多くの方々に、不屈の政治家根本正の人物像を知っていただくこと、その業績を今日に活かして、将来を担う青少年の育成や地域のさらなる活性化を図ろうと進めている事業である。

菅谷地区からは、40名を超える多くの方々が参加して下さい、改めて「根本正」を認識していただけるものとありがたく思う。参加された方々の「口コミ」により、さらに根本正の不屈の精神が広まることを期待したい。あわせて、開催にご尽力いただいた委員会の平野道代委員長さまはじめ、役員の皆様方に感謝、お礼を申しあげたい。



フェスティバル会場

講話 (1) 「不屈の政治家 根本正の生涯」 (山田正巳根本正顕彰会会長)



① 根本正を育んだ環境

庄屋の次男であり、生家に縛られない。幼少期から勉学への意欲があった。それを助ける人的環境に恵まれていた。姻戚関係に、水戸藩の儒学者で彰考館総裁の豊田天功とその子の小太郎に師事できたことが大きい。

② 時代の変化に対応

明治維新により、水戸藩政が終焉したことで東京へ出ることを決意。視野が広まり、新たな出会いが誕生した。中村正直ら海外を見てきた人物に師事し、親交が始まった。それは、米国留学へと発展した。

③ 政治家根本正

米国留学から、キリスト教精神に基づく「平等社会」の実現のためにと、政治家を志す覚悟が固まった。政治家として何をすることが問題であるが、確かな政策を自覚した。「教育立国」を目指すことであり、教育の機会均等と青少年の健全育成である。その実現の背景には、「辛抱強く、諦めない」との胆力が育っていた。「未成年者喫煙・飲酒禁止法」は、「根本法」とも称された。政治家として、名誉この上ない。

④ 根本正から学ぶ

パリ万博の土産であるマッチと時計、これへの新鮮な「感動」が出発点。政治家への志、目標へ向かうひたむきな「努力」「実践力」。政治家に求められるものは、国家全体の在り方と地域への貢献との「広い視野」を持った「発想力」「創造力」。人は、常に多くの人々に支えられているとの自覚から忘れてならない「感謝の念」。

(2) 菅谷地区の歴史的遺産 (仲田昭一顕彰会事務局長)



「菅谷鹿島神社に奉納された扁額」 — 三十六歌仙と平清盛・重盛父子 —

① 「三十六歌仙」の奉納

三十六歌仙の奉納には、地域及び住民の安穏な生活と五穀豊穡への祈念が込められている。この絵馬には、高名な製作者等の美術的価値云々ではなく、明治時代の初め、菅谷地区住民がこぞって奉納したところに大きな意味がある。拝殿には当時の人々の、燃えるような熱い情熱と気概、その息吹がみなぎっている。

② 絵馬「平清盛と重盛」の奉納

菅谷の住人高野知厚が明治18年(1885)に奉納したものである。絵は、水戸藩の絵師松平雪江である。太政大臣にまでなった平清盛は、「驕る平家は久しからず」と批難された人物であった。子の重盛は学問正しく正義感の強い人物、自分の子どもの礼儀知らずの過ちについて、学問が足りないと責めて親の務めを果たした。近衛大臣としては、軽々に軍を動かすことを戒めとしていた。

この絵馬は、後白河法皇を攻めようと武装した父清盛を、平服の子の重盛がそれは不忠であると責め、諫言する場面である。清盛は、重盛の来訪を聴いて慌てて法衣をまとい平静を装ったが、重盛は父を「不忠者」と責めた。しかし自分重盛は、これは「不孝者」ではないかと迷った。進退窮まった重盛は、父に向かい、まず自分の命を奪ってから出発してほしいと訴えた。「忠ならんとすれば孝ならず、孝ならんとすれば忠ならず」との劇的場面である。君臣関係、親子関係、教育の在り方など、教えが一杯詰まった絵馬である。

根本正が目指した「教育立国」の理念に通じる。今日的問題としても、奉納者の悲願に応えたい。